

# 啄木のふるさと『もりおかの短歌』

## 第十四回年間最優秀賞決定!

啄木のふるさと「もりおかの短歌」事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である「三行書き」の短歌づくりを通じて「短歌のまち もりおか」を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。  
四つの期間(夏の部・秋の部・冬の部・春の部)に分けて募集し、一年間に応募のあった三四一首(一般部門)の中から第十四回目となる年間優秀作品が決定いたしました。  
今回も多くのご投稿をいただきありがとうございます。誌面を通じてお礼申し上げます。

### 年間の最優秀賞(一首)

擬宝珠下  
染物流し藍揺れて  
職人巧古都守りたり

盛岡市 三澤信裕

#### 【受賞者からのコメント】

過分な思いがけない通知を頂き驚きと恐縮の至りです。上の橋下、木綿の藍染流しは古都盛岡の情緒と堅実な土地柄を彷彿させ心に染みる。いつまでも情緒ある風情と堅実性、伝統技を失わない盛岡であって欲しい。

#### 【審査員講評】

(松田) 上ノ橋界隈の染物流しの光景を、丁寧に見て詠われています。声に出してみるとボキボキ折れる感じがしませんか。助詞を補って滑らかな表現にするとよいでしょう。

(山本豊) 盛岡の歴史の一面を情景豊かに表現しています。擬宝珠は、中津川に掛かっている上ノ橋と下ノ橋に現在各々十八個づつありますが、とても風情を感じさせてくれます。染物職人たちが、中津川で藍染の染料を洗い流している様子が素直に伝わる歌です。

(赤澤) 技術は昔の方法を変えて、時代とともに変化してゆく。それを進歩と言うのはやむを得ないだろう。その中で、昔ながらの方法を守り続けている人がいる。それが、この歌の主題である。「藍揺れて」に作者の心を見る。

(山本玲子) 「ふるさとの歌に向かいて言うことなし」と言いたい。初夏の雫石川の水音、風のささやき、向こうに見える岩手山が時を越えて眼前に迫ってくる。私はこの歌が好きだ。なぜならこの歌は間違いなく古都盛岡を言い表しているから。

### 年間の優秀賞(二首)

雪形の鷺がくさり浮き上がり  
今日は畑に  
石灰を撒く

盛岡市 中島久光

#### 【受賞者からのコメント】

市民農園の募集を公報で知り、庄ヶ畑のファミリー農場の一面を借りして7年になります。岩手山頂に鷺の雪形が表れた時が、石灰を撒く目途にしています。実際は家内が農作業のほとんどをしております。

#### 【審査員講評】

(松田) 岩手山は「岩鷺さん」と呼ばれて親しまれてきた名峰です。山肌の残雪が羽を広げた鷺に見える頃が春耕の目安とされてきました。下の句の具体も効果的です。

辛い時いつも仰ぐは岩手山  
強く生きよと  
鼓舞してくれぬ

盛岡市 小林貴史

#### 【受賞者からのコメント】

十九の春に盛岡に来て住みついて、盛岡の人を娶り、盛岡訛りの子達が育った。いつの間にか八十路を越してしまっただが、自宅からも見える崇高な岩手山に毎日癒やされながら、楽しく元気に暮らして参りました。

#### 【審査員講評】

(松田) 盛岡に暮らす人の多くは日々見慣れた山ですが「強く生きよ」と気持をふるい起こさせ、励ましてくれる山であることであらためて実感しました。

### 年間の奨励賞(二首)

初めてのさんさ踊りに  
魅了され  
夢中で手拍子二歳の娘

岐阜県可児市 有田峻

#### 【受賞者からのコメント】

初めて訪れた盛岡。この地で、つなまでつなぐ盛岡さんさ踊りを拝見。太鼓や笛・唄・踊り手に魅了され、二歳の娘は夢中で手拍子を打つ。まるで、自分が踊り手のように…。いつの日か、成長した娘と共に盛岡へ、再び。

#### 【審査員講評】

(松田) 二歳の女の子の、あどけなく楽しそうな手拍子と表情が見えるようです。「サツコラチヨイワヤツセ」囃子言葉が

図書室の  
窓に親しき岩手山  
一礼をして旅立つ朝

秋田県大仙市 鈴木仁

#### 【受賞者からのコメント】

平成も三十年を数える冬、私は仕事で盛岡にいた。職場は車で一時間程の所だったが、当初は新幹線に乗って行けば着く東京よりも遠く感じられた。しかし春になり転勤となると、毎日見ていた岩手山が励ましてくれた。

#### 【審査員講評】

(松田) 作者の通う大学の「図書室」でしよか。その窓から見える岩手山にいつしか親しみを覚えるようになり、卒業の朝「一礼をし」た作者の人となりも滲

きつと幸せを運んでくることでしょう。  
(山本豊) 祭りには人間の血を沸き立たせる根元的な力を持っています。二歳の娘さんも、たとえ初めてであってもそれが感じられ手拍子を打ったことと思います。とても明るく、読む側に元気を与えてくれる歌です。折しも「盛岡さんさ踊り」が三年ぶりに開催されます。

(赤澤) 夏祭りのさんさ踊りを見ているお嬢さんを数えず活写した。さんさ踊りの短歌は数多くある。だから難しい。他の人の目に映らないことを見なければならぬ。作者の目には、美しい短歌一首を生み、思いのひとつとした。

(山本玲子) 生まれて初めてさんさ踊りを見たなら、太鼓と音乱舞、笛の音が切れ目なく通り過ぎてゆく。私だったら、もう圧倒されて隣さもせずその場に立ちすくんでしまうかもしれない。二歳の娘さんは大物になる!

む表現です。  
(山本豊) 図書室の窓から数限りなく見えてきた岩手山。その岩手山に向かって旅立つ朝に一礼をしたという事実が心引かれます。余程岩手山に対する思いが深くなければこういう行為はなさらないと思えます。「旅立つ」の具体的な内容が解かるようにすれば良かったと思います。

(赤澤) この短歌にも岩手山が出て来る。岩手山は郷愁を誘うのであろうか。図書室の窓から美しい山を見たのだ。作者は岩手生まれの人かも知れない。旅立ちになり心に波紋を起す。上の句を下の句がしっかりと受け響いている。  
(山本玲子) 学生時代が鮮やかによみがえってくる。そして慣れ親しんだ岩手山に別れを告げるシーンではじりんと来ようしまう。何かドラマでも見ているようなこの歌に、しばし立ち止まって会話をしたくなる。